

オバマ大統領広島訪問を報じるアメリカ主要5紙の記事の比較

大橋理枝¹⁾

A Comparison of Five Major US Newspaper Articles on Obama's Visit to Hiroshima

Rie OHASHI

要旨

本稿では2016年5月27日（日本時間）にアメリカ合衆国のオバマ大統領が広島を訪問したことを伝えるアメリカの主要5紙（*The Wall Street Journal*, *The New York Times*, *USA Today*, *The Washington Post*, *Los Angeles Times*）の記事の内容を比較した。その結果、記事の題の比較からは、今回のオバマ氏の広島訪問を「犠牲者への追悼の意を表しながらも謝罪はしなかった」という切り口で捉えている新聞と「核兵器廃絶へのオバマ氏の意向が現れたものであった」という切り口で捉えている新聞があることがわかった。また、各記事の冒頭の一文の比較からは、今回のオバマ氏の広島訪問が原爆の犠牲者への追悼であったという側面を強調したものと、広島を訪れたこと自体を焦点にして述べたものがあることが分かった。更に、オバマ氏が広島で行ったスピーチからの引用箇所を比較した結果、新聞ごとに引用語数にかなりの差があることが分かった。また、犠牲者に関する言及を多く引用した新聞と、核廃絶の意向を述べた部分を多く引用した新聞があったことも分かった。全体の論調を比較した結果、市民的な目線を大切にしている新聞と、政治的背景に多くを割いている新聞とがあることが分かった。通してみると、題・冒頭文・引用箇所・全体の論調とが比較的似た傾向を示している新聞と、題・冒頭文・引用箇所・全体の論調とに幅がある新聞があることが分かった。

ABSTRACT

This study is a comparison of the articles by five major US newspapers (*The Wall Street Journal*, *The New York Times*, *USA Today*, *The Washington Post*, and *Los Angeles Times*) on president Obama's visit to Hiroshima on May 27, 2016 (Japan time). The comparison on the titles of the articles showed that some newspapers were framing the Obama's Hiroshima visit as "showing condolences for the victims yet not apologizing," whereas other newspapers were framing it as "Obama's manifestation of an endeavor towards the world without nuclear weapons." The comparison of the first sentence of the articles found that some newspapers worded the sentence as if the purpose of Obama's trip to Hiroshima was to mourn the victims of the atomic bomb, yet other newspapers were focusing on the facts related to the visit itself. The comparisons on the quotes from Obama's speech revealed that there was a large difference between the articles on the number of words quoted, and that some newspapers quoted more from his words on victims while other newspapers quoted more from his prospect for the world without nuclear weapons. The comparison on the general tone of arguments indicated that a certain article was centered on the viewpoints of ordinary citizens while another was attentive to the political issues behind this event. The overall analyses showed that some papers were relatively consistent in its tone among the article's title, the first sentence, quotations from Obama's speech, and the general argument, whereas other papers were combining different stances in the aforementioned four parts.

1. はじめに

2016年5月27日（日本時間）に、アメリカ合衆国第

44代大統領であるバラク・オバマ氏は、71年前に世界で最初に原子爆弾が落とされた地である広島市を訪問し、10分程度で原爆資料館を訪問した後、平和記念公

¹⁾ 放送大学准教授（「人間と文化」コース）

表1 アメリカ合衆国の新聞部数上位5紙

	合計	印刷版	デジタル版	ブランド版
ウォール・ストリート・ジャーナル	2,378,827	1,480,725	898,102	—
ニューヨーク・タイムズ	1,865,318	731,395	1,133,923	—
USAトゥデイ	1,674,306	1,424,406	248,900	—
LAタイムズ	610,593	432,873	177,720	43,275
ニューヨーク・デイリー・ニューズ	516,165	360,459	155,706	—

・月曜～金曜の平日版の集計

・デジタル版：レプリカ版（印刷版と同一のpdf版など）とノンレプリカ版（編集・コンテンツ・レイアウトなど印刷版と同一でないもの）の合計

・ブランド版：通勤客向けに記事を要約したものや英語以外の言語によるもの

（日本ABC協会のウェブサイトから転載）

園で行われた式典で17分間に及ぶスピーチを行い²⁾、被爆者の代表者2名と対面した。このオバマ大統領の広島訪問をアメリカの主要紙がどのように報じたのかを内容分析によって比較検討することが本稿の趣旨である。

是永（2008）は「ある争点に関する内容をどのような情報の構成で提示するかによっても、人々の持つ社会への理解の仕方が異なってくるのが明らかになっている」（p. 204）と述べる。同じ対象を報道する際にどのような報道の仕方をするかによって、それぞれの新聞がその読者を異なった理解に導くことは当然想定できる。従って新聞ごとの報道内容の比較を行うことは今回のオバマ氏の広島訪問がアメリカの人々にどのように理解され得たのかを探る上で意義があると考えられる。

2. アメリカの「主要紙」と分析対象記事

アメリカでは日本の「4大紙」のような全国紙より、各地の大都市を中心とした販売地域を持っている地域紙の方が多い。しかしながら、当然地域紙は販売地域に居住する人口の多少が発行部数にも影響を与えらる。従って本稿では「全国紙」とされるものを中心に比較を進める。

何が「全国紙」に当たるのかという点については、はっきりとした定義があるわけではないが、WikipediaがAlliance for Audited Media（AAM）による集計として挙げている全米発行部数トップ25のリストには、*The Wall Street Journal*, *The New York Times*, *USA Today*, *The Washington Post*が全国紙として挙げられている。また、Beaujon（2014）によると、AAMの発表によるアメリカの新聞の中で発行部数が多いトップ3は、*USA Today*, *The Wall Street Journal*, *The New York Times*となっている。一方、日本

ABC協会はAAMが発表した2012年10月～2013年3月のデータとして、表1の5紙を挙げている。

従って本稿では、AAMが「全国紙」扱いしている4紙に加え、AAMの集計で発行部数が多い *Los Angeles Times* を加えた5紙をアメリカの主要紙と捉え、それぞれがオバマ大統領の広島訪問を報じた記事の中で、どのような内容について言及していたかを分析する。分析対象とする記事は下記の通りである。

・*The Wall Street Journal*（以降WSJと略記）

“Obama: Memory of Hiroshima Bombing ‘Must Never Fade’—U.S. president offers condolences, not apology, to victims of Aug. 6, 1945, atomic bombing”

（オバマ：広島への爆撃の記憶は「決して薄れてはならない」—米国大統領による1945年8月6日の原子爆弾投下の犠牲者への弔意表明、謝罪はせず³⁾）

【本文のみ⁴⁾で1,398語】

・*The New York Times*（以降NYTと略記）

“At Hiroshima Memorial, Obama Says Nuclear Arms Require ‘Moral Revolution’”

（広島での追悼式にて、オバマは核兵器が「倫理的革命」を要すると言明）

【本文のみで1,414語】

・*USA Today*（以降USAと略記）

“Sympathy for victims but no apology as Obama makes historic Hiroshima visit”

（オバマの歴史的広島訪問に際し、犠牲者に同情を表するも、謝罪はなし）

【本文のみで854語】

・*The Washington Post*（以降WPと略記）

“In Hiroshima 71 years after first atomic strike, Obama calls for end of nuclear weapons”

²⁾ NHK NEWS WEB に掲載されているスピーチの動画（「核なき世界への決意表明」）は、同時通訳者の声が残っている部分を除けば17分10秒程度で終わる。<http://www3.nhk.or.jp/news/special/obama-message/>（2016.10.25. 参照）

³⁾ 訳は原題に含まれている内容語をすべて訳出することを心掛けたため、日本語で新聞の見出しとしては不自然に感じられるものもある。

⁴⁾ 各記事の題はここに表示されているので除いて数えた。また、LATには“HIROSHIMA, Japan”という打電地の記載がなかった（他紙は全て同じ記載形式だった）ため、その部分も除き、純粋に記事本文の語数のみを数えた。

表2 各紙の記事の題の内容

	WSJ	NYT	USA	WP	LAT
1945年8月6日に広島に核爆弾が投下されたことへの言及	○			○	
現存する核兵器への言及		○		○	
謝罪しなかったことへの言及	○		○		
廃絶への努力が表明されたことへの言及		○		○	○

(最初の核攻撃から71年後の広島にて、オバマによる核兵器廃絶の呼びかけ)

【本文のみで1,498語】

・ Los Angeles Times (以降 LAT と略記)

“In historic visit to Hiroshima, Obama calls on the world to morally evolve”

(広島への歴史的訪問にて、オバマは世界に倫理的進化を遂げるよう呼びかけ)

【本文のみで1,236語】

最も長いWPの記事は、最も短いUSAの記事の1.75倍である。また、この件に関する記事を一面に掲載した新聞もあれば、そうでない新聞もあった(真鍋、2006)。

3. 分析結果

3.1 記事の題

佐藤(1998)は、新聞の文体を「必要最小限の事実から記述を始めるリード付きの『逆ピラミッド』文体」(p. 69)と表現する。このことから、記事の題や最初の一文はそこで書かれている内容を集約したものであると考えられる。それらを比較することによって、それぞれの記事が今回の一件をどのように捉えようとしていたかに違いがあるかどうかの一端を浮き彫りにできると考える。

先に挙げた各紙の記事の題を更に詳しく検討してみると、「オバマ」と「ヒロシマ」は全ての記事の題に含まれている。が、それ以外の語については表2のように整理できる。

WSJはオバマ氏の広島での演説を、1945年8月6日にアメリカが広島に原子爆弾を投下したことに対するものである、という捉え方をしている。これは原爆投下の日時まで題に記した上で、「犠牲者へのお悔やみを述べた」ことを題に入れている一方、それ以外のことには言及していないことからはっきりとわかる。これと比較的似た捉え方をしているのが、題に「犠牲者への同情表明、しかし謝罪なし」と入れているUSAだが、ここではアメリカが原爆投下の主体であったこ

とは述べられていない。一方、この両者に共通する点として「謝罪なし」をはっきりと書いていることが挙げられる。今回のオバマ氏の広島訪問に際しては、原爆投下国であるアメリカの現職大統領が、謝罪を表明するか否かということは大きな争点であり、アメリカ国内では謝罪不要論も強かった。記事の題からこの点について言及されているということは、謝罪の有無がいかに大きな争点であったか(若しくは有り得たか)ということの意味しているともいえる。

ある意味この二紙とは対極的な立場を取っているのがNYTである。題の中には1945年のアメリカによる原爆投下に関することは何一つ触れられておらず、オバマ氏がスピーチの中で語った核廃絶への思いのみが述べられている。この題からは、このスピーチが広島で行われたことに対する意味合いは感じ取れない。「ヒロシマ」という地名が単に「追悼式が行われた場所」という意味合いしかもたなくなるような題だといえよう。尤も、「ヒロシマ」という地名自体が「世界で初めて核爆弾が使われた地」として人々の間に理解されていることを前提にするのであれば、「ヒロシマ」という地名を出すだけで十分だという考え方もあるかもしれない。「ヒロシマ」という地名がどのような意味を持っているのか、そしてそれが誰にどこまで伝わるのが期待できるのかについては、NYTの読者層を考慮する必要があると考えられる。

残り二紙は上記2つの立場の中間と言えそうである。WPは題の前半で「初めての核爆弾投下から71年後の広島で」と述べることによって1945年8月6日のことに触れている一方、題の後半ではオバマ氏が核廃絶を訴えたことを述べている。LATも「ヒロシマへの歴史的訪問で」という部分で「ヒロシマ」が単なる地名ではないことを示唆していると考えられる。題の後半ではスピーチの中でオバマ氏が核兵器廃絶への思いを語った部分に触れている。

これらの点を図1のように図示したい。

3.2 最初の一文

佐藤(1998)の「逆ピラミッド型」の文体を考慮すれば、記事の最初の一文で何を述べるかという点も、

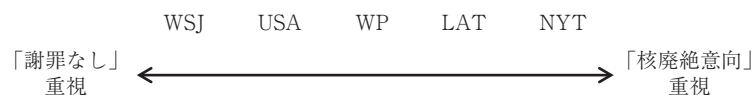


図1 各紙の記事の題の姿勢

表3 各記事の冒頭の一文

WSJ	President Barack Obama mourned the victims of the U.S. atomic bombing of Japan at the memorial honoring those who died in the Aug. 6, 1945 attack on Hiroshima, the first visit to this city by a sitting U.S. leader.	バラク・オバマ大統領は、現職のアメリカ合衆国大統領によるこの地への初めての訪問で、1945年8月6日の広島への攻撃で亡くなった方への追悼式においてアメリカによる日本に対する原子爆弾投下の犠牲者を悼んだ。
NYT	President Obama laid a wreath at the Hiroshima Peace Memorial on Friday, telling an audience that included survivors of America's atomic bombing in 1945 that technology as devastating as nuclear arms demands a "moral revolution."	オバマ大統領は金曜日に広島平和記念公園で花輪を捧げ、1945年にアメリカが投下した原子爆弾の生存者を含む聴衆に対し、核兵器のような破壊的な科学技術は「倫理的革命」を要すると語った。
USA	President Obama made an emotional and historic visit to this once-shattered city Friday, embracing survivors of the Aug. 6, 1945, atomic bomb blast and renewing calls for an end to nuclear weapons.	オバマ大統領は金曜日に、一旦破滅的被害を被ったこの街への、感動的且つ歴史的な訪問を行い、1945年8月6日の原子爆弾の生存者を抱き締め、改めて核兵器の廃絶を呼びかけた。
WP	Nearly 71 years after an American bomber passed high above this Japanese city on a clear August morning on a mission that would alter history, President Obama on Friday made a solemn visit to Hiroshima to offer respects to the victims of the world's first deployed atomic bomb.	アメリカの爆撃機が、ある晴れた8月の朝に、歴史を変える任務を帯びて、この日本の街の上空高くを飛んでからおよそ71年後、オバマ大統領は金曜日に、世界で最初に投下された原子爆弾の犠牲者たちに敬意を表すため、厳粛に広島を訪問した。
LAT	President Obama came face to face with the horror of nuclear war Friday in a somber visit to Hiroshima, becoming the first sitting U.S. president to tour the site of the atomic bombing 71 years ago that killed tens of thousands in an instant and ushered in the nuclear age.	オバマ大統領は金曜日に、広島への厳粛な訪問で、現職のアメリカ大統領として初めて、一瞬にして何万人もの命を奪い、核時代の到来を招いた、71年前の原子爆弾投下の現場を見学し、核戦争がもたらす恐怖と直接向き合った。



図2 一文目の焦点

記事が書かれた姿勢を知る上で重要な観点となるだろう。各紙の冒頭の1文は表3の通りである（訳は筆者による）。

英語では主語の直後に文の主動詞が来るという言語構造を利用して、まず各紙が「オバマ氏が何をした」と書いているかを比較してみよう。WSJは“mourned the victims”（犠牲者を追悼した）、NYTは“laid a wreath”（花輪を捧げた）、USAは“made an emotional and historical visit”（感動的且つ歴史的な訪問を行った）、WPは“made a solemn visit”（厳粛な訪問を行った）、LATは“came face to face”（直接対面した）と述べている。WSJとNYTは「原子爆弾の犠牲者への追悼」という側面を前面に出し、USAとWPは「広島への訪問」を主意に掲げ、LATは「核戦争のもたらす恐怖との直面」に焦点を当てている。これらをまとめて、図2のように図示したい。

また、一文目で各紙が触れている内容を分析する

と、表4のように整理できる。

広島に原子爆弾が投下されたという事実及びその年については全紙で何らかの言及があったが、これがアメリカによって投下されたものであったことを述べていたのはWSJ、NYT、WPの3紙のみであった。また、今回のオバマ氏の広島訪問が現職のアメリカ大統領による初のものであったことを述べているのはWSJとLATのみであった。一方、今回のオバマ氏の広島でのスピーチの内容が核兵器の廃絶への思いを述べたものであったことに言及しているのはNYTとUSAのみであった。

広島訪問に言及している3紙が付した形容詞も興味深い。先にも述べた通り、USAは“emotional”及び“historic”、WPは“solemn”を付しているが、これに加えてLATが“somber”を付している。Solemnもsomberも、決して明るい様子を表現する語ではなく、重々しさや憂いを示す語である。Historicは事実を述べ

表4 各紙の冒頭一文の内容

	WSJ	NYT	USA	WP	LAT
アメリカによる原爆投下	○	○		○	
現職大統領による初の広島訪問	○				○
1945年（8月6日）、又は71年前	○	○	○	○	○
核兵器廃絶への意向		○	○		

表5 オバマ氏の広島スピーチの中で引用された箇所（具体的な箇所は付録参照）

	WSJ	NYT	USA	WP	LAT
1945年8月6日に関わること	○	○		○	
広島に来ることの意義	○	○	○	○	○
戦争そのものへの否定的言及や反省	○	○	○		○
科学技術及び人類への警鐘		○			○
歴史・過去への反省	○	○			○
核兵器廃絶への思い		○		○	○
現在の広島の様子		○		○	

表6 引用箇所の重複語数

	WST	NYT	USA	WP	LAT
WST	—				
NYT	5	—			
USA	0	0	—		
WP	0	68	12	—	
LAT	25	37	0	0	—

る言い方として中立的であり、emotionalは情意的ではあっても明るさや暗さは意味しない。

一方、書き方として最も情緒的なのはWPであろう。1945年8月6日朝の広島が晴れていたことが歴史的事実であることをはじめ、この一文には事実と違うことは一言も書いていない。にも拘わらず、単に淡々と事実を述べるのではなく、読者に過去のある時点の情景を想像させる力を持った文であるという点は、他の4紙とは大きく異なっている。

3.3 スピーチからの引用

オバマ氏は式典内で17分を超えるスピーチを行った。1,451語⁵⁾に及ぶこのスピーチのどの部分を各紙が引用したかという点についても検討したい。

具体的な引用箇所については付録に示したが、スピーチからの直接引用が最も多かったのはLATの195語で、NYTの168語がそれに続く。反対に引用が最も少なかったのはUSAの42語で、WSJの71語がそれに続き、WPは103語を引用に宛てていた⁶⁾。USAとLATとの間には4.6倍以上の開きがあることは着目に値するだろう。記事全体の中での引用部分の割合については、WSJが5.1%、NYTが11.9%、USAが4.9%、WPが6.9%、LATが15.8%となっており、LATとNYTが

引用に比較的多くの割合を充てていることが分かる。

引用されている箇所の内容については、表5のように整理できる。

何故今広島に来る必要があるのか、という点については、全紙がオバマ氏自身の言葉を引き合いに出して論じている（但し引用している箇所は同じではない）。今回の広島訪問に際してはアメリカ国内では相当の議論があったことは想像に難しくなく、各紙もその点についてはオバマ氏の言葉自体を使って論じようとしている姿勢が窺える。

表6に記事間の引用箇所の重複をまとめる。引用箇所が少ない新聞でも、他紙では引用していない箇所から引用しているところがある一方、引用箇所が多い新聞同士で同じところを引用しているところもある。

最も引用箇所の重複が多いのはNYTとWPで、どちらもスピーチの最後の段落を丸々引用している（68語）。NYTとLATの引用が重なっているところも2か所あるし（合計37語）、WSJとLATの間でも25語分重複がある。一方、WSJとUSAとの間、WSJとWPの間、及びNYTとUSAの間では1か所も引用箇所が重複していない。

引用箇所の内容については、図3のように図示したい。



図3 引用箇所の内容

⁵⁾ NYTで出している書き起こし文による。

http://www.nytimes.com/2016/05/28/world/asia/text-of-president-obamas-speech-in-hiroshima-japan.html?_r=0

⁶⁾ 一紙の中で同じ箇所を2回以上引用している場合も1度しか数えていない。

表7 各紙の記事内容

	WSJ	NYT	USA	WP	LAT
現職米国大統領による初めての広島訪問	○	○	○	○	○
初/唯一の核兵器使用	○	×	○	○	○
長崎	○	○	○	○	○
謝罪なし	○	○	○	△ ⁷⁾	○
核のない未来・核兵器廃絶	○	○	○	○	○
日本側の反応（市民・メディア・被爆者を含む）	○	○	○	×	○
安倍首相	○	○	○	○	×
被爆者との対面	○	○	○ ⁸⁾	○	○ ⁹⁾
広島訪問の背景	○	○	○	○	×
第二次世界大戦	○	○	○	○	○
日本の戦争責任	×	○	×	×	×
アメリカ側の反応	○	○	○	○	×
オバマ氏による核軍縮努力の不成功	○	○	×	○	○
広島訪問の具体的行程や式典	○	○	○	○	×
平和祈念館のゲストブックへの記載	○	×	×	○	○
米軍の核兵器使用による戦争終結	○	○	○	×	○
原子爆弾の説明（犠牲者数への言及も含む）	○	○	○	○	○
式典前後の広島市内の様子	○	○	○	○	○
平和記念公園について	×	○	○	×	○
全体の印象	被爆者に焦点 (対面・反応)	広島訪問への 背景を詳述	日米共に庶民 の反応に焦点	オバマ氏滞日 中の動きを詳 述	原爆の説明、 千羽鶴の説明

3.4 全体の論調

ここまでは記事の詳細部分を見てきたが、ここでは最初の文や引用部分も含めた形で記事の全体像を把握したい。内容分析に際しては、発行部数の最も多いWSJに記してある内容を元に、記事の内容を分類するための項目を作成し、各々の分類項目に該当すると考えられる記述が他の記事にあるかどうかを検証した。全ての記事を一旦分類し終えた後で分類項目を再検討し、全ての記事を通して最も適切であると思われるカテゴリーを抽出した。結果を表7に示す。

全ての記事が言及しているのは、(A) オバマ氏が広島訪問を実現させた初の現職アメリカ大統領であること、(B) 長崎にも原子爆弾が落とされたこと、(C) オバマ氏がスピーチの中で謝罪を述べなかったこと、(D) オバマ氏がスピーチの中で核兵器廃絶を訴えたこと、(E) オバマ氏がスピーチを終えた後で被爆者と直接対面したこと、(F) 第二次世界大戦への何らかの形での言及、(G) 原子爆弾の説明（犠牲者数などへの言及も含む）、そして(H) 式典前後の広島市内の様子の描写、の8点だった。原子爆弾についての言及は5紙全てで見られたが、中でもUSAとWPはその被害者の中に韓国・朝鮮人が含まれていたことを言明していた。NYTは、今回のオバマ氏の広島訪問で日本側が自らの第二次世界大戦中の行為に対する反省

に終止符を打ってしまうことを懸念しているという点には言及していたものの、原爆の犠牲者に韓国・朝鮮人が含まれていたことには言及していない。

5紙中4紙が記載しているのは、(1) 1945年8月6日の原子爆弾が人類最初/唯一の核兵器の使用であった点、(2) オバマ氏の広島訪問に対する日本側の反応、(3) 安倍首相への言及、(4) 今回のオバマ氏による広島訪問の背景、(5) オバマ氏の広島訪問に対するアメリカ側の反応、(6) オバマ氏による核軍縮努力の不成功、(7) オバマ氏の広島訪問時の具体的な行程や式典内容、(8) 米軍の核兵器使用による第二次世界大戦終結、の8点だった。米軍の核兵器使用による第二次世界大戦終結に言及しなかったWPは、「長崎に原爆が投下されて1週間後に日本の天皇は敗戦を宣言した」と述べると共に、トルーマン大統領による原爆投下の決断は米軍による日本の本土進攻の計画を回避するためだったとする歴史家の言を紹介している。他紙も「原爆投下は誤りではなかった」という説を自紙の立場であると明言するものではなく、WSJはアメリカ上院議員の話として、NYTは歴史家が述べていることとして、USAはアメリカの退役軍人や元捕虜が述べていることとして、それぞれこの説を紹介している。唯一LATだけがオバマ氏自身が信じていることとして広島と長崎への原爆投下が第二次世界大戦を終わらせ

⁷⁾ スピーチの中で謝罪しなかったことに直接言及するのではなく、今回の訪日が謝罪目的ではなかったことを記述。

⁸⁾ 森氏への言及のみ

⁹⁾ 坪井氏への言及のみ

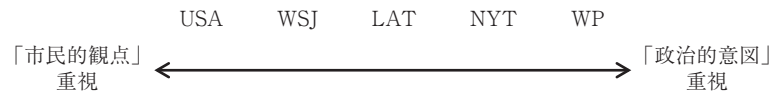


図4 記事全体の論調

たと書いている (“Obama did not apologize for the nuclear attacks here and in the city of Nagasaki, strikes **he believes** ended the perils of Japanese aggression and brought about the end of World War II.” 太字は筆者による)。果たしてこの記述が妥当なものと言えるのかどうか、筆者は疑問を禁じ得ないのが正直なところである。

逆に、5紙中1紙しか言及していない点として、日本の戦争責任が挙げられる。NYTはオバマ氏がスピーチの中で第二次世界大戦の責任は日本にあると明言した (“he made clear that Japan, despite a highly advanced culture, was to blame for the war”) と述べている。しかしながら、この点については逆にLATは「大統領は1930年代から40年代にかけて日本が行った帝国主義的な拡張の残酷さについては語らなかった。」 (“The president, though, refrained from talking about why the U.S. dropped the bombs and did not emphasize Japan’s brutal colonialist expansion in Asia in the 1930s and ’40s.”) と述べており、この2紙の間でかなり大きな齟齬が生じている。

また、全体的な論調として何を重視して記事を書いているかについても、新聞ごとに違いが見られた。WSJは被爆者との直接対面や式典に参列していた他の被爆者などへの言及が多く、本人たちの言葉も掲載していた。一方、NYTは今回のオバマ氏の広島訪問の背景をかなり詳しく説明していた。USAはその比較的短い記事の中で庶民の声を拾うことを重視しており、日本側の反応もアメリカ側の反応も一般庶民の言葉を掲載していた。WPはオバマ氏の日本での行動をかなり細かく述べており、広島に行く前に訪問した岩国の米軍基地でのスピーチの内容まで記載されていた。LATは原爆自体の説明が他紙より多く、また学徒動員の話や佐々木貞子氏の千羽鶴のエピソードまで紹介していた。この辺りは各紙がどのような人々を読者層として想定しているかが如実に現れる部分だといえるだろう。

これらを大局的に勘案して、図4のように図示したい。

4. まとめと課題

今回はオバマ氏の広島訪問という同じ取材対象を報道したアメリカ主要5紙の内容を比較してみた。これまでの分析の結果をまとめて、図5のように図示したい。

左右の項目を上記のように取ると、どの新聞の線も随分ジグザグしているように見えてしまう。これは新聞の記事を書く上で、題・一文目・引用とを併せてバランスを取ろうとしていることの現れであるといえるだろう。逆に、ジグザグが少ないものの方が、全体の論旨が一定の方向を向いているといえる。この観点からみると、WSJは半部より右側に位置する項目はない。また、LATは半部より左側に位置する項目がない。これら2紙は比較的傾向が分かり易い新聞だと言えるのかもしれない。一方、ジグザグが大きいNYT、USA、WPの3紙については、少なくとも今回分析した記事については、様々なところで様々な観点を取り込もうとしていたことが窺える。その中でも若干特徴的なのは、USAはスピーチの引用内容と全体の論調がほぼ一致しているのに対し、NYTとWPは一文目の内容と全体の論調とが似た傾向を示しているという点である。興味深いのは、これら3紙とも題と一文目との不一致が大きいということだろう。「逆ピラミッド型」の最初の部分だからこそ、ここで記事全体のバランスを取ろうという苦心の跡が窺えるように思う。

では実際にアメリカではこれらの報道はどのように受け止められたのだろうか。朝日新聞ニューヨーク支局長である真鍋（2016）は次のように述べている。

翌日朝の新聞では、大手紙は立場を問わず、一面で大きな扱いをした。リベラル色の強いニューヨーク・タイムズは1面トップで、ワシントン・ポストは1面の左肩に細長く記事を載せた。保守系とされるウォールストリート・ジャーナルも、オバマ氏が被爆者の森重昭さんの肩を抱く写真を一面に大きく載せていたのが印象的だった。社説な

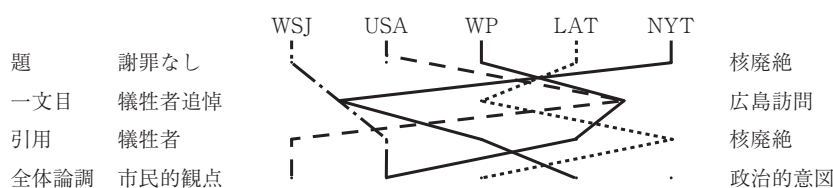


図5 まとめ

どの主張に違いはあれど、主流メディアはおおむね、「謝罪なき追悼」を前向きに報じた。

その一方で、真鍋（2016）は「今回の訪問は、米国の一般市民の胸にどれだけ響いたのだろうか」とも問い、次のように述べている。

この静けさ。これは、オバマ政権が周到に準備を進め、保守派を気遣いながら「謝罪はしない」ことを徹底して表明したことが背景にあるのだろう。メディアも国民も決して感情的になることなく、淡々と「現職米大統領の広島訪問」は受け止められた。大統領選のさなか、保守もリベラルもあえて「寝た子を起こす」ような議論を避けたという面もあるに違いない。

確かに、今回のオバマ氏の広島訪問が大統領選挙と重ならなければ、アメリカ国内でもっと活発な議論が起きたであろうことも推測できる。が、逆にそのようなことが予想できるような状況下では、オバマ氏の広島訪問自体が実現できなかったかもしれない。このような背景の中でなされた報道で合ったという点には留意しておきたい。

今回の分析に当たってはそれぞれの新聞社が元来持っている性質（「保守派」「リベラル」など）は考慮せず、紙面に現れたテキストのみを分析した。また、それぞれの新聞が対象としている読者層（例えばWSJはホワイトカラーのビジネスパーソンが主、USAはWPに比べれば大衆的、など）も考慮していない。それぞれの新聞の性質や読者層を考慮した分析を行えば、それぞれの記事がこのように書かれた理由もある程度解明できると思われる。

さらに、今回分析したテキストは各紙のウェブ版から採ったが、それぞれの記事が掲載されているページには数多くの写真や動画、他の記事へのリンクなどがあつた。このような提示構造は、一つの記事では必ずしもすべてを伝えきれなくても、ウェブページ全体としては伝えきれなかった部分の情報の補完が可能であることを示唆する。この点は旧来の新聞の在り方とは異なった報道のし方を導き出すと考えられるかもしれない。この点については今後更なる研究が必要である。

柏倉（2009）は、マスメディアで報じられるのは記号化された現実であると言う。その言い方に従えば、今回の分析はアメリカの主要5紙がどのようにしてオバマ氏の広島訪問を記号化したのかの比較であったといえる。2016年5月27日のオバマ氏の広島訪問を、各紙はそれぞれの角度から「記号化」し、読者に届けようとした。その「記号化」が、ある新聞社では「オバマ氏が原爆の犠牲者を悼んだ」という形の題で表現され、別の新聞社では「オバマ氏が広島で核兵器廃絶を訴えた」という一文目の記号化になったのである。また、何事を報道する場合も必ず幾重もの取捨選

択が行われる。それぞれの題の元に書かれた記事は、まずは記者の目によって記されるべきものと省かれるべきものの取捨選択が行われ、次に新聞の編集者によって新聞という形で提示するための記号化に際する取捨選択が行われる（記者の書いた記事への修正や紙面上の割り付けなど）。新聞記事はそれらの取捨選択の結果として、私達の元に届いているのである。今回の分析を通して、政治的・外交的に緊張を孕む事柄の報道に際して行われる取捨選択の観点が、具体的な形で垣間見えたように思う。

参考文献

- 柏倉康夫（2009）『私たちはメディアとどう向き合ってきたか』左右社。
- 是永論（2008）「メディアと世論形成：重層的なネットワークの中で作られる現実」橋元良明編著『メディア・コミュニケーション学』第11章（pp. 197-215）大修館書店。
- 佐藤卓己（1998）『現代メディア史』岩波書店。
- 日本ABC協会（2013）「海外動向—アメリカの新聞部数」
<http://www.jabc.or.jp/info/news/5892.html>
（2016.10.25 参照）
- 真鍋弘樹（2016.6.14）「オバマ広島訪問の『波紋』：静けさの意味」朝日新聞デジタル版。
<http://digital.asahi.com/articles/ASJ6B4JQ8J6BUH-BI019.html>（2016.10.26 参照）
- Beaujon, A. (2014.10.28) "USA Today, WSJ, NYT top U.S. newspapers by circulation"
<http://www.poynter.org/2014/usa-today-wsj-nyt-top-u-s-newspapers-by-circulation/277337/>
（2016.10.25 参照）
- Harris, G. (2016.5.27) "At Hiroshima Memorial, Obama Says Nuclear Arms Require 'Moral Revolution'" *The New York Times* デジタル版
http://www.nytimes.com/2016/05/28/world/asia/obama-hiroshima-japan.html?_r=2（2016.10.25 参照）
- Lee, C. E., & Martin, A. (2016.5.28) "Obama: Memory of Hiroshima Bombing 'Must Never Fade'—U.S. president offers condolences, not apology, to victims of Aug. 6, 1945, atomic bombing" *The Wall Street Journal* デジタル版
<http://www.wsj.com/articles/obama-spotlights-peace-nuclear-nonproliferation-on-hiroshima-visit-1464317247>（2016.10.25 参照）
- Nakamura, D. (2016.5.27) "In Hiroshima 71 years after first atomic strike, Obama calls for end of nuclear weapons" *The Washington Post* デジタル版
https://www.washingtonpost.com/politics/obama-visits-hiroshima-more-than-seven-decades-after-the-worlds-first-atomic-strike/2016/05/27/c7d0d250-23b6-11e6-8690-f14ca9de2972_story.html
（2016.10.25 参照）
- Parsons, C., & Makinen, J. (2016.5.27) "In historic visit to Hiroshima, Obama calls on the world to morally evolve" *Los Angeles Times* デジタル版
<http://www.latimes.com/world/la-fg-obama-hiroshima-20160527-snap-story.html>（2016.10.25 参照）
- Spitzer, K. (2016.5.27) "Sympathy for victims but no apol-

ogy as Obama makes historic Hiroshima visit” *USA Today* デジタル版

<http://www.usatoday.com/story/news/world/2016/05/27/obama-visit-hiroshima-bomb-site-pledges-no-apology/85022938/> (2016.10.25 参照)

Wikipedia “List of newspapers in the United States”

https://en.wikipedia.org/wiki/List_of_newspapers_in_the_United_States (2016.10.25 参照)

付録：米国主要各紙によるオバマ大統領広島演説引用箇所¹⁰⁾

凡例：Wall Street Journal(71語), The New York Times(168語), USA Today(42語), The Washington Post(103語), Los Angeles Times(195語)

Seventy-one years ago, on a bright cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed. A flash of light and a wall of fire destroyed a city and demonstrated that mankind possessed the means to destroy itself.

Why do we come to this place, to Hiroshima? We come to ponder a terrible force unleashed in a not-so-distant past. We come to mourn the dead, including over 100,000 Japanese men, women and children, thousands of Koreans, a dozen Americans held prisoner.

Their souls speak to us. They ask us to look inward, to take stock of who we are and what we might become.

It is not the fact of war that sets Hiroshima apart. Artifacts tell us that violent conflict appeared with the very first man. Our early ancestors having learned to make blades from flint and spears from wood used these tools not just for hunting but against their own kind. On every continent, the history of civilization is filled with war, whether driven by scarcity of grain or hunger for gold, compelled by nationalist fervor or religious zeal. Empires have risen and fallen. Peoples have been subjugated and liberated. And at each juncture, innocents have suffered, a countless toll, their names forgotten by time.

The world war that reached its brutal end in Hiroshima and Nagasaki was fought among the wealthiest and most powerful of nations. Their civilizations had given the world great cities and magnificent art. Their thinkers had advanced ideas of justice and harmony and truth. And yet the war grew out of the same base instinct for domination or conquest that had caused conflicts among the simplest tribes, an old pattern amplified by new capabilities and without new constraints.

In the span of a few years, some 60 million people would die. Men, women, children, no different than us. Shot, beaten, marched, bombed, jailed, starved, gassed to death. There are

many sites around the world that chronicle this war, memorials that tell stories of courage and heroism, graves and empty camps that echo of unspeakable depravity.

Yet in the image of a mushroom cloud that rose into these skies, we are most starkly reminded of humanity’s core contradiction. How the very spark that marks us as a species, our thoughts, our imagination, our language, our toolmaking, our ability to set ourselves apart from nature and bend it to our will — those very things also give us the capacity for unmatched destruction.

How often does material advancement or social innovation blind us to this truth? How easily we learn to justify violence in the name of some higher cause.

Every great religion promises a pathway to love and peace and righteousness, and yet no religion has been spared from believers who have claimed their faith as a license to kill.

Nations arise telling a story that binds people together in sacrifice and cooperation, allowing for remarkable feats. But those same stories have so often been used to oppress and dehumanize those who are different.

Science allows us to communicate across the seas and fly above the clouds, to cure disease and understand the cosmos, but those same discoveries can be turned into ever more efficient killing machines.

The wars of the modern age teach us this truth. Hiroshima teaches this truth. *Technological progress without an equivalent progress in human institutions can doom us. The scientific revolution that led to the splitting of an atom requires a moral revolution as well.*

That is why we come to this place. We stand here in the middle of this city and force ourselves to imagine the moment the bomb fell. We force ourselves to feel the dread of children confused by what they see. We listen to a silent cry. We remember all the innocents killed across the arc of that terrible war and the wars that came before and the wars that would follow.

Mere words cannot give voice to such suffering. But *we have a shared responsibility to look directly into the eye of history and ask what we must do differently to curb such suffering again.*

Some day, the voices of the hibakusha will no longer be with us to bear witness. But the memory of the morning of Aug. 6, 1945, must never fade. That memory allows us to fight complacency. It fuels our moral imagination. It allows us to change.

And since that fateful day, we have made choices that give us

¹⁰⁾ 和訳は下記から入手可能である。

・米国大使館のウェブサイト

<https://japanese.japan.usembassy.gov/j/p/tpj-20160527-02.html>

・朝日新聞デジタル版 <http://www.asahi.com/articles/DA3S12380530.html>

・時事ドットコムニュース <http://www.jiji.com/jc/v4?id=obama-hiroshima0005>

・産経ニュースウェブ版

<http://www.sankei.com/premium/news/160527/prm1605270008-n1.html>

また、池上 (2016.6.24 : <http://digital.asahi.com/articles/DA3S12424249.html>) は日本の主要紙の訳の違いを論じていて興味深い。

hope. The United States and Japan have forged not only an alliance but a friendship that has won far more for our people than we could ever claim through war. The nations of Europe built a union that replaced battlefields with bonds of commerce and democracy. Oppressed people and nations won liberation. An international community established institutions and treaties that work to avoid war and aspire to restrict and roll back and ultimately eliminate the existence of nuclear weapons.

Still, every act of aggression between nations, every act of terror and corruption and cruelty and oppression that we see around the world shows our work is never done. We may not be able to eliminate man's capacity to do evil, so nations and the alliances that we form must possess the means to defend ourselves. But among those nations like my own that hold nuclear stockpiles, we must have the courage to escape the logic of fear and pursue a world without them.

We may not realize this goal in my lifetime, but persistent effort can roll back the possibility of catastrophe. We can chart a course that leads to the destruction of these stockpiles. We can stop the spread to new nations and secure deadly materials from fanatics.

And yet that *is not enough*. For we see around the world today how even the crudest rifles and barrel bombs can serve up violence on a terrible scale. *We must change our mind-set about war itself. To prevent conflict through diplomacy and strive to end conflicts after they've begun. To see our growing interdependence as a cause for peaceful cooperation and not violent competition. To define our nations not by our capacity to destroy but by what we build. And perhaps, above all, we must reimagine our connection to one another as members of one human race.*

For this, too, is what makes our species unique. We're not bound by genetic code to repeat the mistakes of the past. We can learn. We can choose. We can tell our children a different story, one that describes a common humanity, one that makes

war less likely and cruelty less easily accepted.

We see these stories in the hibakusha. The woman who forgave a pilot who flew the plane that dropped the atomic bomb because she recognized that what she really hated was war itself. The man who sought out families of Americans killed here because he believed their loss was equal to his own.

My own nation's story began with simple words: All men are created equal and endowed by our creator with certain unalienable rights including life, liberty and the pursuit of happiness. Realizing that ideal has never been easy, even within our own borders, even among our own citizens. But staying true to that story is worth the effort. It is an ideal to be strived for, an ideal that extends across continents and across oceans. The irreducible worth of every person, the insistence that every life is precious, the radical and necessary notion that we are part of a single human family — that is the story that we all must tell.

That is why we come to Hiroshima. So that we might think of people we love. The first smile from our children in the morning. The gentle touch from a spouse over the kitchen table. The comforting embrace of a parent. We can think of those things and know that those same precious moments took place here, 71 years ago.

Those who died, they are like us. Ordinary people understand this, I think. They do not want more war. They would rather that the wonders of science be focused on improving life and not eliminating it. When the choices made by nations, when the choices made by leaders, reflect this simple wisdom, then the lesson of Hiroshima is done.

The world was forever changed here, but today the children of this city will go through their day in peace. What a precious thing that is. It is worth protecting, and then extending to every child. That is a future we can choose, a future in which Hiroshima and Nagasaki are known not as the dawn of atomic warfare but as the start of our own moral awakening.

(2016年10月28日受理)